

境界としての身体、もしくは享受する自我 —『全体性と無限』における「享受」の意義—

浦上麻衣子

Abstract

The purpose of this paper is to reinterpret Levinas's concept of enjoyment in a positive way. This concept seems to have often been denied for the reason of its egoism. However, it is an indispensable condition for the ethical subjectivity. First, this paper shows that the dimension of enjoyment to be formulated as "Iiving from..." is of an original nature since the being I is only produced by the egoism of the life through this dimension. Second, it also shows that such an "I" produced by the egoism concretely exists in the world as the very corporal I. Finally, it reveals that the ethical subjectivity opens from the I to the extent that it stands as a body in the world, which is determined as the limit between the internal and the external.

キーワード……享受 自我 生 幸福 身体

はじめに

レヴィナスの思想において、他者の問題とともに主体性の問題もまた中心的な位置をしめているということは、すでに多くの先行研究によって指摘されている⁽¹⁾。『全体性と無限』の序文においても、本書の目的が主体性を擁護することにあるということがはっきりと述べられている(『T』p. xiv / 上巻一二五頁)。言うまでもなく、レヴィナスの思想の本丸は、絶対的に他なるものとしての他者との倫理的関係を探求することであり、レヴィナスが擁護しようとする主体性もまた、他者との倫理的関係を可能にするような主体性である。ここでは、こうした主体性を倫理的主体性と呼ぶことにする。

では、なぜ「享受」をとりあげるのか。それは、倫理的主体性の条件として〈同〉としての自我が必要とされており、そうした〈同〉としての自我が享受によって生起するからである。本論考では、〈同〉としての自我の、いわば萌芽期にあたる部分について論じ、〈同〉としての自我が含みもつ根源的な性質を明らかにしたい。

一、表象における〈同〉と享受における〈同〉

レヴィナスは、表象を自我の根底に位置づけるという考え方を

批判しながら考察を重ね、自我の基礎に、表象に先立つ「享受」[jouissance]という次元を導入する。以下に見るように、レヴィナスは、享受という次元を提示することによって、表象にもとづく自我が遡及することのできる自我の最終段階ではないということを示そうとする。表象と享受の比較に入る前に、レヴィナスが自我をどのようなものとしてとらえていたかを確認しておく。

自我であること、それは座標系によって定めることができる
 どんな個体化をも超えて、同一性を内容として所有している
 ということである。自我、それはつねに〈同〉のままどどま
 っている存在ではなく、現実存在することが自己同一化する
 ことであり、自己に到達するすべてのものを横切つて、自己
 の同一性を再び見出すことであるような存在である。自我は
 特別な同一性であり、同一化の本源的な働きである。(77.p.6
 /上巻 四五・四六頁)

レヴィナスは自我を基本的には同一化の本源的な働きとしてとらえている。レヴィナスが問題とするのは、自我がどのようにして〈同〉として同一化するかという点である。レヴィナスは〈同〉としての二つのあり方を提示する。一方は表象にもとづくものであり、他方は享受にもとづくものである。レヴィナスは、表象にもとづく同一化を否定し、〈同〉の同一化は享受にもとづくもので

あると主張する。では、表象と享受はどのように対比させられているのか。

レヴィナスが表象として享受に対比させているのは、対象化する作用の観想的志向性とフッサールが呼ぶ志向性としての表象である(77.p.95/上巻 二三八頁)。レヴィナスは、「表象の対象は表象の作用から区別される」という考えが「フッサール現象学の基礎的かつもつとも豊かな主張」であることを認めるが、それでもなお表象の対象は依然として思考に内在していると考える(77.p.96/上巻 二四〇頁)。

明晰性 [clarté] においては、最初は外的な対象が、対象に出会う者へ自己を与える。換言すれば、まるで対象が完全にその者によって規定されていたかのように、その者へ自己を引き渡す。明晰性において、外的な存在はそれを受容する思考の産物として現われる。(77.p.96/上巻 二四一頁)

レヴィナスはデカルトのいう明晰判明な観念を念頭におき、明晰性において現われる対象、すなわち了解されるものは、思考によってつくり出されたものであると述べる。明晰性は了解可能性 [intelligible] を特徴づけている。了解されるものとは、思考する者と完全に合致した思考されるものである。したがって、了解されうる対象は思考に対して外的な存在ではない。レヴィナスは

了解可能性と表象とのあいだに本質的な相互関係を認めている。「了解可能であるということ、それは表象されているということである」(77 p. 99/上巻 二四八頁)。したがって、表象においても了解の場合と同様、明晰性にもとづく対象の内在化が働いていることになる。表象されたものは思考する者によって支配され、ノエマに還元されるのである。

以上のことから、表象における自我のあり方は以下のように提示される。

我々が《同》を《同》と呼ぶのは、自我は表象においてまさに、自己の対象との対立を失うからである。対立が消去されて、対象の多様性にもかかわらず存在する自我の同一性が際立たせられることになる。換言すれば、まさに自我の変化しえない性質が際立たせられることになる。(同)にとどまること、それは自己を表象することである。「……」(他)との関係において、変化せず、変化しえない《同》の同一性、それがまさに表象の自我である。(77 p. 99/上巻 二四六・二四七頁)

自我によって表象された対象とは、すでに自我の思考のうちに内在している対象であり、自我の思考に対して外的な存在ではない。そのため、表象する自我に対して外的な対象は現れない。(同)が

(他)との関係において変化することがないのは、表象において厳密な意味での(他)は存在しないからである。

さらに、表象における(同)と(他)との関係は以下のように提示される。

表象において、《同》は《他》と関係しているが、そこで《他》は《同》を規定せず、《他》を規定するのはつねに《同》であるような仕方であり、《他》と関係している。(77 p. 97/上巻 二四三頁)

(同)に対する(他)が存在したとしても、表象における(他)とは(同)によって規定されたものにすぎない。このように、外的な存在は表象され了解されることによって外部性を失う。外部性を喪失した表象における自我は、自己反省によって自己同一化せざるをえないが、自己反省とは「自己が自己を抽象的に表象することをめぐる反省」(77 p. /上巻 四八頁)であるため、レヴィナスは自己反省にもとづく自己同一化を空虚なもののみならず、すべてが思考の産物と化してしまう表象においては、世界と自我との具体的な関係が見失われてしまうからである。レヴィナスは表象にもとづく自我に対して批判的だが、表象そのものを否定しているわけではない。レヴィナスが批判するのは、享受によって基礎づけられていない「根こそぎにされた」[déracinée] 表象であ

る。

では、表象に対し、享受はどのように述べられているのか。レヴィナスはまず、志向性において両者の違いを見出す。レヴィナスは、表象の志向性に対し、享受の志向性は外部性に固着するという。外部性に固着するということは、たんに世界を肯定することではなく、「世界のうちで身体としてみずからを定立することである」(77p. 100/上巻 二五〇頁)。ここからレヴィナスは、享受にもとづく世界と自我との関係を次のように提示する。

自我と世界とのあいだの真の、そして本源的な関係は、世界の中に滞在すること [séjour] として生起する。そしてその関係において自我は、まさに特別な《同》として顕現する。

世界という「他」に対する《同》のふるまい方 [manière] は、滞在することに、すなわち、我が家で [chez soi] 現実存在しながら世界において滞在すること、自己同一化することにある。(77p. 7/上巻 四八頁)

レヴィナスは享受 [jouissance] を「〜によって生きること」[vivre de...] として定式化する。この「〜によって生きること」によって、外部性を否定することなく、外部性を引き受け、それとともにある関係のうちに入ることが可能となる。その関係とは、「《同》が〈他〉によって規定されながら〈他〉を規定する」(77p. 101/

上巻 二五一頁) 関係である。こうして、享受における〈同〉は、〈他〉に依存しながら〈他〉を規定するという構造をもつものとして提示される。

レヴィナスは、享受にみられる依存の側面を取り上げ、表象が享受に反転可能であるとともに、表象が享受によって基礎づけられていると主張する。たとえば、何かを表象するに先立って私は対象を眼差す。そのとき、私の眼差しは私の目(身体)によって支えられている。私の眼差しは、私が身体として世界の中に定位しているということによって可能となる。つまり、世界の中に定位しているということが私の眼差しの条件となっている。そして、私の定位はたとえば栄養物によって可能となる。私は栄養物を摂取し、栄養物によって生きること、眼差すことや表象することができるようになる。このように考えると、表象に対する享受の先行性が明らかになる。

レヴィナスは、享受の次元を導入することによって、レヴィナスの考える意味での「具体的な関係」(77p. 7/上巻 四八頁) から自我をとらえなおす。すなわち、レヴィナスは、自己反省によってつくり出される二重化された自己、すなわち思考する自我と思考される自己との合致において自己同一化するような自我ではなく、世界という「他なるもの」の中で生起していく自我のあり方を示す。つまり、「自我、すなわち絶対的な始まりが、自我でないものに宙吊りにされている仕方」(77p. 102/上巻 二五三頁)

を示す。以下では、自我がどのように生起し自己同一化していくかを、享受の理論を追いながらみていく。

二、享受⁽²⁾

享受の次元が表象に先立っているということから、自我の生起する場も表象から享受へと移される。ここではまず、享受の基本的なモデルを確認しておく。レヴィナスは享受において自我が生起するさまを以下のように述べている。

享受は自己への退却であり、内への旋回 [involution] である。「……」自我はじつさい、享受の基体 [support] ではない。「……」自我は「……」享受によって巻きつきと内への旋回が描かれる、螺旋の極である。曲線の中心が曲線の一部になっっているのだ。(77.p.91/上巻 二二〇頁)

レヴィナスが提示する享受のモデルは「螺旋」であり、享受における主体としての自我は「享受によって巻きつきと内への旋回が描かれる、螺旋の極」である。この場合、極はあらかじめ想定された極として存在しているわけではない。「曲線の中心が曲線の一部になっている」という表現からもわかるように、極は享受とともに生じてくる。享受における自我とは享受しながら生起するよ

うな自我であり、「享受することにおいてはじめて、自我が結晶する」(77.p.118/上巻 二八九頁)。したがって、ここで提示されている自我とは、享受することに先立って成立し、享受することを支えるような基体となり、享受することを表象したり反省したりするような超越論的な自我ではない。

もう一度、あらためて確認しておく、享受とは「くによって生きる」として定式化されていた。これはすなわち、享受が生次元に属していることを意味する。「くによって生きる」とは、依存(くによって)と自存(生きる)という両義性を含んだ表現である。したがって、享受はこうした両義性を抱えているということになる。

以下では、こうした両義性における自存の側面から、享受にもとづいて生起する自我について考えていく。自存性は、享受の至高性の原動力となっており、享受にともなう幸福 [bonheur] によって養われる。レヴィナスは幸福のうちに、自存性をはじめ、個体化、自己人格化、実体化といった、自我が自我として確立していくためのさまざまな契機を見出し(77.p.121/上巻 二九六頁)、次のように述べている。「人格の人格性、自我の自己性、こうした原子と個体の特殊性以上のことからは、享受の幸福における特殊性である」(77.p.88/上巻 二二二-二二三頁)。幸福における特殊性が、原子と個体性の特殊性以上のものであるとはいかなることか。

レヴィナスは次のように述べている。

自我はすでに卓越した意味において現実存在している。じつさい、自我をまず現実存在する者として想像し、それから幸福を授けられた者として想像することはできないし、その幸福が現実存在に属性としてつけ加わると想像することもできない。自我は、享受によって分離されたものとして現実存在する。換言すれば、幸福な者として現実存在し、幸福のために自己のたんに純粹な存在をささげることができる。自我は、卓越した意味において現実存在し、存在を越えて現実存在する。(77 p. 34 / 上巻 一〇八頁)

レヴィナスはまた「生の現実はすでに幸福の水準にあり、その意味で、存在論の彼方にある」(77 p. 84 / 上巻 二一六頁)とも述べている。レヴィナスは、享受によって生きる幸福な自我は存在を越えて現実存在していると言うが、これは一体なにを意味しているのだろうか。ここには少なくとも二つの意味が含まれているように思われる。一つめは、「くによって生きる」という享受の定式が、あらゆる活動に先立っているということである。二つめは、生存に対比される生の剰余である。

一つめの事がらは、次の引用文から明らかになるように思われる。

もし「くによって生きる」、享受が、同様に、他のものとの関係に置かれることであるとしても、その関係は純粹な存在の平面で描かれることはない。存在の平面で展開される活動そのものは、そのうえ、我々の幸福のうちに含まれている。我々は、諸々の観念や感情によって生きているのと同じように、諸々の活動によって、存在するという活動そのものによって生きている。私が行うこと、私であるところのものは、同時に、私がそれによって生きているものである。(77 p. 85 / 上巻 二一六・二一七頁)

レヴィナスは、存在しているという活動もすでに「くによって生きる」という定式のうちにあると考えている。レヴィナスが「究極的な関係とは、享受であり幸福である」(77 p. 85 / 上巻 二一七頁)と述べるように、根源的であるのは存在ではなく生のエゴイズムである。レヴィナスは、存在という全体性を基盤として、そこから自我が生起すると考えるのではなく、各々の情動性にもとづいて自我が生起し、自存すると考える。これによって、自我は存在者一般という匿名性へ陥ることなく、各々の特殊性を維持することが可能となる。こうして自我は存在の地平から解放される。

二つめの点は、情動性にもとづいて自我が生起するという、まさにそのことと関わっている。数ある情動性のなかで、自存につながるレヴィナスが考えるのは幸福である。

幸福の自存性は、つねにある内容に依存している。だが、この関係は、結果が原因に依存するような関係とは異なる(71 p. 82 / 上巻 二二二頁)。幸福の自存性とその内容との独特な関係は、生に対するレヴィナスの考え方に由来する。レヴィナスは、生と生の内容との関係を、生存を維持するという目的と、その目的を達成するための手段という関係としてはとらえていない。というのも、人の生はそうした目的・手段連関のうちに取りまきけるようなものではないからである。人はたしかに栄養を摂取することによって生きている。だが、人はたんに栄養を摂取することだけによつて生きているのではない。たとえば、煙草やコーヒー、酒といった嗜好品のたぐいは、たんに物理的な観点からのみ考えれば、たとえそれらを欠いたとしても生きていけるようなものである。そればかりか、これらは人を死に至らしめることさえある。そのため、生存を維持するという観点から見れば、これらは生にとつて不必要なものであるとも言える。だが、人はそうした嗜好品を欠くくらいであれば死を選ぶこともあるのだ。こうした事態は、依存症という現象において典型的に認められるが、病を患つて床に臥しているといった身近な例においても認めることができる。寝たきりのまま、たんに管を通して体内に栄養を送り込んでいるだけであるような生活は実に味気ないものであり、そうした状態が長引けばたいいの人が生きることがやめてしまいたいと思うだろう。このように、人の生を豊かにするものは生存に「必要不

可欠なもの」(71 p. 83 / 上巻 二二二頁)であるとは限らない。そして、生を享受するということは必ずしも生存へと結びつくものではない。だが、目的もなくただ生を享受するだけのこうした活動によつて、人は「元気を回復する」(71 p. 83 / 上巻 二二二頁)ことができるのである。

レヴィナスの考える生を、そこに無理やり目的・手段連関を持ち込んで述べるならば、生きることによつて生きるということである。「人はその生を生きる。生きることは、そこで生の内容が直接補語であるような他動詞としてある。そして、そうした内容を生きるという活動は、それ自体として [ipso facto] 生の内容である」(71 p. 83 / 上巻 二二三頁)⁽⁶⁾。この場合、生を充たす内容は、表象されたり意識されたりするものではない。「そうした内容は生きられ、生を養うのである」(71 p. 83 / 上巻 二二三頁)。生の内容となつてゐるのは、生の内容を生きるという活動である。つまり、生きるということにおいては、生きるという活動そのものが目的となつてゐる。このように、生を味わい楽しむことは目的・手段連関からは逸脱している。「享受は、存在において私を維持することではなく、すでに存在を超えている」(71 p. 85 / 上巻 二二八頁)。こうした生の次元に属する享受は、生存を目的とするような存在の次元にとつては剰余となる。このような意味で、幸福の自存性が存在を超えているということが理解される⁽⁷⁾。そして、人は生きているという単純な事実によつてすでに幸福のうちにあ

るとレヴィナスは考える（77 p. 85 / 上巻 二一七頁）。生とは自足であるというこの構図は、先に示した享受の螺旋モデルとまさに一致している。

三、エゴイズムと内部性

自存の側面について考察をおし進めていくにつれ、享受の自我の内部性が次第に明らかになっていく。レヴィナスは、享受を螺旋にたとえて語った先の引用文のあとに、こう続けている。

享受はまさに「巻きつき」(enroulement)として、すなわち自己へ向かう運動として働く。(77 p. 91 / 上巻 二二〇頁)

享受において自我は終わりなき昂進を繰り返しながら生起していくのだが、その際、享受は「自己への退却」、「自己へと向かう運動」として作動する。享受する自我は、享受することによって自足している。自足とは、「エゴの凝縮そのもの」であり、「自己に対する」(pour soi) 現実存在」である（77 p. 91 / 上巻 二二九頁）。自己に対して存在するとは、究極的には、ひと口のパンをめぐってひとを殺すような場合に見られる、自分のために「pour soi」存在するというエゴイズムである。「享受において、私は絶対的に私のために存在する。他人へのかかわりを欠いたエゴイス

トである」(77 p. 107 / 上巻 二二六頁)。したがって、生の次元において他人は存在しない。たしかに自我は「他なるもの」と関係しているが、享受における「他なるもの」とは自我がそれによって生きるものである。すなわち、自我のなかに同化可能であり、自我を幸福にし、生きようとする気力を与えるものである。このことから、享受における「他なるもの」は自我を養うもの(nourish)、「すなわち「糧」(nouriture)として表現される。享受において自我は、糧としての「他なるもの」とだけかかわっているということから、享受は内部性の次元として規定される（77 p. 122 / 上巻 二九八頁）。

享受の自我は「他なるもの」と関わっているが、エゴイズムによって「他なるもの」の外部性は抹消されてしまう。だが、享受における内部性は、「他なるもの」の存在を認め、「他なるもの」と関わっているという点で表象における内部性とは区別される。享受の内部性とはどのようなものなのだろうか。

すでに述べたように、享受における「他なるもの」とは自我が同一化できる限りでの「他なるもの」であり、絶対的な他者ではない。また、対象としての「もの」でもない。「もの」は、享受の観点からは糧として、所有の観点からは対象として現われるが（77 p. 135 / 上巻 三二八頁）、いずれの場合も、他者と区別するため、自体的に「un soi」存在しないものとして、すなわち、私や他者との関係の中でしか現われてこないものとして規定されている

(77 p. 136 / 上巻 三三〇頁)。ここでは享受にかかわる「もの」、すなわち自我を養う糧としての「もの」についてみていく。

享受は、正確には、ものとしてのものに到達しない。ものは、そこからのものが浮かび上がる背景から表象に至る。そして、ものについて我々に可能な享受のさなかで、ものはその背景へ戻っていく。(77 p. 103 / 上巻 一五七頁)

ものがそこから私たちに到来する背景のことをレヴィナスは「環境」[milieu]と呼ぶ(77 p. 104 / 上巻 一五八頁)。環境とは、大地や海、光、都市といった、「共通の、本質的に「誰にも」所有しない基底あるいは領域」(77 p. 104 / 上巻 一五八頁)である。レヴィナスはこのような所有不可能なものを「元素」[élément]と呼ぶ(77 p. 104 / 上巻 二五八頁)。「元素はそれを内含する形式を持つていない」(77 p. 104 / 上巻 二五八頁)ため、我々は元素に接近することも所有することもできない。我々は元素を環境として発見し、それに浸るといしかたでしか関係することはできない。たとえば、船乗りは海と風を利用し、支配するが、海や風を「もの」に変容するわけではない。というのも、海や風は、船や権のように規定されたあり方を保ってはいないからである。享受とは元素の中に浸り、純粋な質を享受するということである。「享受において質は、あるものの質ではない。私を支える大地

の堅固さ、私の頭上の空の青さ、風のそよぎ、海の波浪、光の輝きは実体にかかっているのではない」(77 p. 二四 / 上巻 二八一 - 二八二頁)。純粋な質は、その質を支えるような基体や実体をもっていない。空の青さ、風のそよぎ、海の波浪、光の輝きなどといったものは、それだけで端的に存在していて、だれによっても同じように感じられる、といったものではない。それらは、享受する者のもとで享受されることによって現われるのであり、だれにも享受されなければ現われることも存在することもないだろう。空の蒼さや、風のそよぎといったものは、ひとがその中に浸り、それらを生きたことで感覚される。「人は感覚的な質を認識するのではない。人は感覚的な質を生きた。人は、この葉の緑、この夕日の赤さを生きたのである」(77 p. 108 / 上巻 一六八頁)。このように、享受は浸るといふ形で元素に直接関係しており、享受において自我は元素と渾然一体となっている(77 p. 130 / 上巻 三一六頁)。

以上のことから、享受の内部性は、外部性に対して規定された内部性というよりもむしろ、外部性がいっさい存在しないことによつて規定される内部性であるといえる。こうした外部性の不在は、享受の自我が境界を持たないことに由来する。享受の段階にある自我は、いまだ内部性を確立できていないがために外部も有していない。したがって対象を持たない。

こうした、享受の自我の内部的な在り方は孤独としてとらえら

れる。

孤独の享受、あるいは享受の孤独によって達成される全体性との断絶は、根底的なものである。(77 p. 91 / 上巻 二二二頁)

レヴィナスは、享受の孤独によって全体性との断絶が可能になると考える。「孤独」[solitude] は『時間と他者』においてすでに、現実存在している者が存在するという事実そのもののうちにあり(74 p. 22 / 一〇頁)、現実存在する者と現実存在するというその働きのあいだの解消しえない統一性として現われるもの(74 p. 22 / 一〇頁)として述べられていた。初期の論稿では、孤独は「イポスターズ」に起因する主体の定位と関係している⁽⁵⁾。

孤独と質料性は対になっている。孤独は「……」こういってよければ、質料によってとりつかれた日常的な現実存在の伴侶である。(74 p. 39 / 三五頁)

存在者は、現実存在することによって「存在者なき存在」である「イリヤ」を断ち切るとともに質料化する。そこで存在者は、質料性を有するがゆえに自己に繋縛されているが、その反面、質料性を有することによって自由な自我として世界の中に定位している。享受においても、孤独は身体化をともなう自我の定位とし

てとらえることができる。享受の孤独によって全体性と断絶するということは、現実存在することによって「他なるもの」から次第に分離していき、最終的には離れ小島のように孤立することである。孤立した自我は、孤独というよりもむしろ「孤絶」[isolation] (77 p. 90 / 上巻 二二八頁)のなかで、他のだれとも共有不可能なたった一つしかない自己の生を、ただ自分のために[pour soi] 生きるのである。

四、欲求と身体性

ここで、これまでの流れを振り返ってみる。まず、自我は表象ではなく享受に基づいて生起することによって、「他なるもの」との関係性をすでに包含しつつ生起することが明らかになる。だが、享受における自我は「他なるもの」を直接享受しているから、自我と「他なるもの」とのあいだに隔たりはない。だから、自我に外部はない。自我は享受において、自分へ向けて、すなわち、自分のためにだけ生きる。したがって、享受における自我は孤絶している。だが同時に、この孤絶によって全体性との断絶が可能となる。

このように、自我を享受に基づいて生起するものと考えることにより、全体性から分離した自我が可能となる。しかし、自我はまだ享受の直接性から逃れられていないのではないか。もしそ

うであれば、享受の自我はいかにして自らの内部性を確立し、自己に対する外部的な世界を有することができるようになるのだろうか。こうした問いに対して、レヴィナスは「欲求」[besoin]によって答えている。

プラトンが欲求を充足によって充たされるべき欠如、すなわち貧困ととらえたのに対し、レヴィナスは欲求の本質を切断に見る。

貧困は、動物的で植物的な条件を打ち砕くことによって解放された人間が冒す危険のひとつである。欲求の本質は、危険をかえりみないこうした断絶のうちにある。(71 p. 88 / 上巻 二二四頁)

欲求とは、動物的条件、植物的条件からの切断であり、この切断によって人間はこうした条件から解放される。つまり、欲求の本質とは、まず人間が有機的な組織のただ中にあることを前提したうえで、人間と人間が依存している世界とのあいだに隔たりをもつけることにある。欲求というしかたで世界に依存することによって、自我は、世界に浸潤することなく世界の中で現実存在することができるようになる。欲求によって享受が繰り延べられることで、自我は享受の直接性から解放されるのである。こうした自我をレヴィナスは「解放されているが、欲求を有する存在」(71 p. 89 / 上巻 二二五頁)という両義性としてとらえる。「ここに、身

体が継ぎ目そのものであるような両義性がある」(71 p. 89 / 上巻 二二五頁)。レヴィナスの考えによれば、自我は解放と依存という二つの側面を持つ。そしてこの二つの契機は、自我が身体として世界の中に現実存在しているということによって、両義性としてとらえることが可能となる。このようにして自我は、欲求という依存のしかたによって世界と関係することで、境界としての身体を獲得する。

レヴィナスの享受概念をたどる中で見えてくるのは、享受が有する自存と依存という両義性である。こうした両義性のなかで生起する自我もまた、両義的な存在である。そうした自我は、身体として世界の中に定立している。身体の両義性についてレヴィナスは以下のように述べている。

生は身体である。とはいえ、そこで自己充足を記しづけるような固有の身体であるだけではなく、物理的な諸力の交流点、効果としての身体 [corps-effectif] である。[...] 身体であること、それは一方では、自らを保持すること、すなわち自己の主人であることであるが、他方では、大地の上で自らを保持するということ、すなわち、他なるものの中に存在し、そのことによって存在することであり、他なる物体によってふさがれることである。(71 p. 138 / 上巻 三三五頁)

身体であるとは、一方で自己の身体〔corps〕であるということであり、自らを保持する〔se tenir〕ということである。また他方で、他なるものから影響を受け続ける物体〔corps〕であり、大地の上で自らを保持するということでもある。このことから、身体は内部へと向かう享受の「至高性」〔souveraineté〕と、外部の世界への「従属」〔soumission〕という両義性を有する存在であることがわかる（77 p. 138 / 上巻 三三四頁）。換言すれば、身体とは内部性と外部性の境界である。この引用文のすぐ後においても強調されているように、「他なるもの」によって塞がれることはたんなる依存として生起するのではなく、享受する者にとっては幸福となる。すでに見たように、レヴィナスの享受の理論は、享受にとともなう幸福が自存性へとつながり、それによって依存が相殺されるという構造をもっていた。身体は、「自己自身とはべつものものによって生きながら自己自身であること」、「 \sim によって生きること」という、自存と依存との同時性によって構成され（77 p. 139 / 上巻 三三六頁）、内部と外部の境界を生きている。

おわりに

享受は主体性の起源であり（77 p. 86 / 上巻 二一九頁）、分離の生起である（77 p. 34 / 上巻 一〇七・一〇八頁）とレヴィナスは述べている。享受に基づく自我は、最終的に他者との出会いにお

いて仕上げられることになる主体性の議論にとって、基礎となるものである。

レヴィナスは、身体と世界とのあいだの相互作用という問題について「 \sim によって生きること」に連れ戻し（77 p. 139 / 上巻 三三七頁）、享受の理論によって、「他なるもの」のなかで身体的自我がどのようになり成立していくのかを具体的に記述した。レヴィナスは享受の理論において、存在の地平には回収されることのない、「 \sim によって生きる」という依存をともなう自存性こそが根底的なものであると主張した。存在よりも根源的な享受のエゴイズムは、たしかにそれだけで見れば、まったく倫理的なものではない。だがそれは、たんに無慈悲なエゴイズムとして否定されるためだけに持ち出されたものではない。享受のエゴイズムとは、世界のうちに特殊性をもった自我が息づいているということを示すものでもある。享受のエゴイズムは、最終的には否定されることになるとしても、思考する自我が世界のなかで他者へ向かうために不可欠なものとして考えるべきであろう。こうしたレヴィナスの自我論は、モノダ的な側面を含む（と）ともに、モノダ的な自我には回収できない要素も持ち合わせている。そして、内部性と外部性いずれにも特化することなく、それらのあいだで境界としてとどまりつつける身体的自我において、倫理的主体性への道が開かれている。

〈註〉

- (1) 主体性の問題の重要性を明確に指摘しているものとして、たとえば以下の諸文献があげられる。鶴真一「超越の諸相——レヴィナスにおける主体性の問題」『宗教哲学研究』第17号、宗教哲学会、二〇〇〇年、所収／福田敦史「自由の権能を超えた責任と正義——レヴィナスの「享受」、「倫理」、「正義」における主体の自由」『埼玉工業大学教養紀要』第23号、埼玉工業大学基礎教育センター、二〇〇五年、所収。
- (2) 享受概念の包括的な理解については、シュトラッサーの以下の文献を参照。Stephan Strasser, *Jenseits von Sein und Zeit. Eine Einführung in Emmanuel Lévinas' Philosophie*, Martinus Nijhoff, Hague, 1978, pp. 69-72.
- (3) レヴィナスは「*vivre*」を他動詞として用いる。この「*vivre*」は「生きる」という意味となる。したがって「*vivre les contenus de la vie* (生の内容を生きる)」となる。これが「*l'acte de vivre ces contenus* (生の内容を生きる活動)」と言い換えられ、この活動が「*contenu de la vie* (生の内容)」であると述べられている。よって、「生の内容を生きる」という内容を生かす活動が「生の内容」ということになる。
- (4) 「幸福は存在を超える」という表現の解釈については、以下の論文から示唆を与えられた。冠木敦子「レヴィナスの倫理における身体的主体——その予備的考察——」『法学研究』第76巻12号、慶應義塾大学法学研究会、二〇〇三年、所収。とくに三四七頁を参照。
- (5) 初期論稿における主体の定立については以下の論文を参照。屋良朝彦「初期レヴィナスにおける〈存在〉と主体の誕生」『哲学年報』第48号、北海道哲学会、二〇〇一年、所収。
- (6) 『時間と他者』における以下の記述を参照。「私が存在している限り、私はモナドである。私には戸口も窓もないのだが、それはまさしく実存することによってなのであって、私のうちにある伝達しえない何らかの内容によるのではない」(TA p. 21/八・九頁)。また、レヴィナスの主体論とモナドロロジーとの関係を先行研究に拾いつつ紹介・検討したのとしてはつぎのものがある。木元麻里「レヴィナスの主体論——モナドロロジーに関するルノーの解釈を手がかりとして——」『人間文化論叢』第7巻、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、二〇〇四年、所収。

〈参考文献〉

レヴィナスからの引用・参照は以下の略記で示し、／(スラッシュ)のあとには邦訳の頁数を記す。T)の邦訳の頁数は岩波文庫版のものである。

[77] Emmanuel Lévinas, *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*, Martinus Nijhoff, Hague, 1980 (1961).

[74] Emmanuel Lévinas, *Le temps et l'autre*, PUF, 2007 (Fata Morgana, 1979).

邦訳は以下のものを参照した。訳語については変更した箇所もある。

1. レヴィナス『全体性と無限』(上) 熊野純彦訳、岩波文庫、二〇〇五年
2. レヴィナス『全体性と無限』(下) 熊野純彦訳、岩波文庫、二〇〇六年
3. レヴィナス『全体性と無限』合田正人訳、国文社、一九八九年
4. レヴィナス『時間と他者』原田佳彦訳、法政大学出版局、一九八六年

主指導教員(栗原隆教授)、副指導教員(城戸淳准教授・宮崎裕助准教授)